



## 【レビ記: 信じる者の永遠の安息】

本日聖書本文:レビ記25章1-12節/暗唱聖句:ローマ人への手紙12章1節

説教:牧師 鄭南哲

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！例年よりもはやくもう真夏日のような暑さが続いている中一週間もみんなお元気でしたか。6月もさっそく猛暑の日々が続くらしいので、何よりもみんな元気で日々過ごす事ができるように、心も体も強めて下さるように切にお祈り申しあげます！

### <1.レビ記とは？>

旧約の三番目の聖書はレビ記です。イスラエルの民がエジプトに移住してから430年の奴隷生活を通して、神様に遣わされた指導者モーセを通して、御自分の民を救い出させる出エジプトの歴史が記録された聖書が出エジプト記です。出エジプト記は先週学んだようにエジプトの地であるラメセスを出てシナイ山に至るまでの3ヶ月間の旅程が記録された本です。イスラエルの民はシナイの荒野で1年間滞在するのですが、このとき神様からいただいた律法と神のおきてが記録された聖書がレビ記です。

レビ記という意味は“レビ族に属している”, もしくは“レビ族について”という意味です。12部族の一部族であるレビ族は神様が臨在している天幕の管理と神様への礼拝への儀式(ぎしき)とその器具などを管理する部族でした。

レビ記はとっても大切な教えを含めています。実際、新約聖書で一番引用されている旧約の聖書が申命記とレビ記です。これはつまり、レビ記がイエスキリストの働きを説明するとしても大切な御言葉である事を意味します。ところが、読んだことがある方は分かりますが、大切な聖書であるのにもかかわらず、とっても理解しがたい様々な儀式や、わけも分からない内容が書かれているため、始めから難しい聖書だとよけてしまってきた聖書として扱われたと思います。

レビ記は27章で構成された聖書ですが、主に二つのメインテーマを持っています。

一つは1-16章までの内容として、罪人である私たちがどうやって神様の御前に行けるのかを教えて下さいます。

ここでは5つのいけにえについて記録されていますが、罪を犯した我々がどうやってき聖い神様にささげるいけにえをもって出れるか教えてくれます。レビ記に記録されている5つのいけにえは(全焼のいけにえ1,4,8,9)、(穀物のいけにえ2,6,7:血とは関係なく穀物をいけにえとしてささげる)和解のいけにえ3-4章)、(罪のためのいけにえの4-7章:罪洗われときよめられる意味)、(罪過のためのいけにえ5,7章:損害への賠償の意味)です。この中で、一番代表的ないけにえが(全焼のいけにえ)です。イスラエルの民が一番長らく、それも一番頻繁にささげたいけにえでした。全焼のいけにえとは(burnt offering)と言います。全焼のいけにえは傷のない雄牛や子羊をほふってやいてささげます。全焼のいけにえをささげる時、傷のない雄(おす)を会見の天幕にもってきてその動物に手を置きます。傷のないというのは罪のないイエス・キリストを象徴します。動物の頭に手を置くと言うのは人間の罪をその動物に転嫁することを意味します。全焼させたのは完全なる献身を意味します。この動物がまさに犠牲のいけにえであって、これは我々の罪のために血を流し死なれたイエス・キリストの贖いを表します。

(レビ記1:1, 4, 9- 全焼のいけにえは、傷のない物をささげなければならない。それを、主に受け入れられるために会見の天幕の入口の所に連れて来なければならない。1:4その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである。9祭司はこれら全部を祭壇の上で全焼のいけにえとして焼いて煙にする。これは、主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。)

イエス・キリストが来られてからはもはやこのような旧約のようないけにえは必要ありません。なぜなら、イエス・キリストが我々のための犠牲のいけにえとなってくださったからです。そういうわけでローマ人への手紙12章1節ではレビ記に出ているいけにえなどより、“あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い生きた供え物としてささげなさい。”つまり生き方とおしての礼拝を強調しているのです。

レビ記の二つ目の主題は神様の前に立っている我々がどうやって神様と交わるかです。

これが17章以後からの内容です。ここで律法を与えてくださったこと(17章)、きよい生き方の基準(18-22章)を提示しています。そして、様々なまつり、特に安息日、安息年、ヨベルの年23-25章と従順する生活(26章)、誓願(27章)などを教えています。このようなおきてなどは神様との交わりのためです。神様との交わりとは神様からいただいたおきてと命令を守ることだとレビ記は強調します。これはまた私たちが生きている間神様からいただける祝福へ

の道である事を約束しています。

(レビ記26：3-6:もし、あなたがたがわたしのおきてに従って歩み、わたしの命令を守り、それらを行なうなら、4 わたしはその季節にしたがってあなたがたに雨を与え、地は産物を出し、畑の木々はその実を結び、5 あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取り入れ時まで続き、ぶどうの取り入れ時は、種蒔きの時まで続く。あなたがたは満ち足りるまでパンを食べ、安らかにあなたがたの地に住む。6 わたしはまたその地に平和を与える。あなたがたはだれにも悩まされずに寝る。わたしはまた悪い獣をその国から除く。剣があなたがたの国を通り過ぎることはない。)

つまり、神様のおきてと命令に従って行うとき、神様との真の交わりが可能になると言うことです。ですから、神様が命じられたことを守り、行わなければ神様とまことの交わりは断(た)たれてしまいます。そういう意味でレビ記17章以後の内容は神様との交わりのために要求された教えです。

まとめてみると、レビ記は罪人である人間がどうやって神様に近づいて、神様の御前に立った我々がどうやって神様と交わるかの原理が記録された御言葉、一言で言うと礼拝に対する聖書でもあります。創世記では人間の墮落を見て、出エジプト記では人間の救いをみたなら、レビ記では罪赦され救われた者たちの礼拝を見ることができます。出エジプト記のすべての出来事が救いと密接な関係をもっているように、レビ記のすべての制度とおきては礼拝と関連され、そのすべてはやがて来られるイエス・キリストのことを教えています。

レビ記は救われた神様の民も血を流すいけにえを通してのみ神様に出れる事を教えながら、たましいはもちろん、肉体も神様の御前できよくしなければならぬ事を教えてくれます。そういうわけでレビ記はたえず、我々に‘きよさ’を強調します。“あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。”(レビ記11:44-45,19:2,20:7,26)

きよい(Qodesh,Holy)という単語がレビ記で150回以上使われていることはレビ記の一番大切な核心単語である事が分かります。同じ意味の‘きよめる’という意味の(Kosher)という単語も186回も出ています。レビ記は27章ですので、一章一章に聖と関連された単語が27回以上出ていることとなります。神様は罪あるこんにちを生きている我々にも神の民として、神様と交わる者として神様の御言葉を守り従い、きよく生きるようにと願っておられるのです。

## <2.安息日, 安息年, ヨベルの年とは?>

レビ記の後半部である今日の本文25章では、イスラエルの民が約束の地に入ってから守るべき例祭(れいさい)について教えています。それが今日読んだ本文の内容です。今日の本文はとっても特殊な制度が記録されています。それは安息年と大安息年つまりヨベルの年(禧年)の制度です。安息日とほかの例祭についてはすでにレビ記23章で扱っています。その後この二つの制度についてまた言及(げんきゅう)しています。いまイスラエルの民はシナイの荒野にいますが、彼らが約束の地に入ってから守る制度としてこの安息年とヨベルの年を命じられたのです。

我々は6日間働いて、日曜日を休むサイクルにはなれていますが、6年間働いて、7年目は休む安息年とその安息年を7回過ぎてからの次の年、つまり、49年が過ぎて50年目を大安息年、つまり、ヨベルの年についてはあまりよく分かっていません。しかし、この制度は我々に向かう神様の御心が読める特別な制度です。安息日はレビ記23章1-3節のように、この日は神様の創造の働きに従って、神様が定められた日で、6日間頑張って働くようにと命じられた後、次の日の安息日を守るようにと命じられました。安息日は休息と充電で、体と心とたましいの回復を意味します。安息日は六日間(むいかかん)頑張って働き、第七日目は安息することによって神様の御国で味わう安息を経験する日です。

安息年(7年目)とは6年間働いた後、第7年目の年になりますが、この安息年の時には人だけではなく土地も休ませました。つまり、耕すことも休ませたのです(25:2-7節)。この年は何も耕すことをできませんでした。しかし、蒔いてもないのに自然に実を結んだものなどはみんなの者になります。安息年の間の収穫された物は地主や土地の無い者も同じく、地主は自分の地の所有権を主張することができませんでした(6-7節)だれも同じく収穫物を分けて食べましたが、特に貧しい人、やもめや旅人たちのものにもなりました。

今日読んだ8節以下では大安息年のヨベルの年について教えていますが、これは7回の安息年(49年)を過ぎた後、50年目に迎える制度です。この年には祭司が雄羊のつので作った角笛(つのぶえ)を鳴り響かせて全国民に自由を宣布します。そういうわけでこの年を“角笛の年”もしくは“自由の年”とも言います。安息年を7回迎えた次の

年がヨベルの年なので、この時はその前年度の安息年(49年目の安息年)と合わせて2年間安息しました。この年には種まきも禁止され、土地も休ませました。そして、神様は三つのことを命じられました。一つは、すべての土地を地主に返す土地返還(へんかん)です。49年の間は土地を売買できますが、ヨベルの年は土地の持ち主に返されるということです。二つ目はすべての奴隷たちに解放が宣言されます。三つ目はいままでのすべての負債(ふさい)は自動的に帳消(ちょうけ)しされることです。

### <3. 安息年, ヨベルの年に対する二つの疑問>

この話を聞きながらみなさん思われる疑問があると思います。一つは、安息年だけではなくヨベルの年に種まきもしないで、耕すこともしないなら、どうやって生きるの? 安息年とヨベルの年はいったい何を食べながら生きるの? このような疑問は我々だけではなく当時、イスラエルの民ももっていた疑問でした。レビ記25章20節をみてみてください「あなたがたが、「もし、種を蒔かず、また収穫も集めないのなら、私たちは七年目に何を食べればよいのか。」と言うなら”これに対して神様は21節に“わたしは、6年目に、あなたがたのため、わたしの祝福を命じ、三年間のために収穫を生じさせる”と言われました。

そして18-19節にも、満ち足りるまで食べ、安らかに住むようになると約束して下さいました。こんにちに我々とは違って、神様からのこの約束の言葉をイスラエルの民族はよく理解しました。なぜなら、イスラエルの民は荒野の40年を過ごしながら、神様からのその日、その日の必要なマナをいただく経験をしたからです。しかし、神様はこのときも、欲張って次の日の分量まで持っていくと、マナに虫がわいて臭くなって、食べれないようにさせました。しかし、六日目の日は次の日の安息日に備えて二日間の分を持っていくようにさせ、その時だけは臭くならないようにされたのです。(出16:4-30)

もう一つの疑問はこれです。自分のお金で買った土地をなぜ、その地主(ちぬし)に返さなければならないのか、自分のお金で買った奴隷をなぜ自由にさせ、なんの条件なしにすべての負債を帳消しにさせるのかです。普通の理性では考えられないことに、むしろ、経済的な混乱を招(まね)き、これこそ不義であり、不公平ではないか思われるかもしれません。

これについても説明をさせてみましょう。いまはまだイスラエルの民は荒野にいますが、カナン of 地に入ると、神様はイスラエルの12部族に地を分けて下さるでしょう。12部族はそれぞれに部族に属している部族や家族にふたたびその地を分けます。配分されたその地が彼らの所有地になります。つまり、均等な土地配分を通して貧しい人もなく、富んだものも無い平等の共同体になるでしょう。原則的に配分された土地は子孫代々に受け継がせることであって、買ったり、売ったりすることができません。なぜなら、土地の所有者は神様であって、人は土地を管理する管理者に過ぎないからです。(レビ記25:23)

ところが、時間が立てばたつほど、貧富(ひんぷ)の差はかなりついてきて、熱心に働く者がいれば、怠けている人もいるし、歳月が経つにつれ、主人が亡くなったり、土地を耕すことができなくなる場合もあります。長い日照(ひで)りや災害、戦いなどで土地の収穫が得られない場合もあります。そういうわけで、ある人は富むものになりますが、反対にある人は貧しくなる人も出ます。貧しくなった彼らは結局ほかの人のを借りることになります。しかし、その借金を返すことができなくなると土地を売ることになります。それだけではなく土地を売っても借金を返せないと結局奴隷となるしかほかの方法がなくなるのです。

そういうわけで、貧しい者は負債(ふさい)を負(お)っている人、土地を持ってない人、もしくは身を売って奴隷になった者を言います。このような経済的な不均等(ふきんとう)と圧迫から自由を宣布することこそがこのヨベルの年の精神だと思えます。同じ神様によって造られた人にもかかわらず、人から支配される奴隷的な生活も苦しいですが、人を支配することも正しくないことです。そういうわけで、このヨベルの年はこの土地が本来の持ち主に引き返されるようにされたのです。イスラエルの民は事実、土地を売買したのではなく土地使用権を売買したのです。ヨベルの年が近づくと、残りの年に何回収穫できるかを計算して土地の使用費用を減らしました。結局、ヨベルの年の宣布は社会の不平等(ふびょうどう)を招(まね)く三つの問題を解決する神様側からの制度だったのです。つまり、天然資源である土地の返還、人的資源である奴隷の解放、債務の解決を宣布することにより自由と平等と安息の年、新しい人生への解放を知らせる解放の年だったのです。

### <4. なぜ神様は安息日と安息年、ヨベルの年を守ると命じたのでしょうか?:その意味>

最後に、なぜ神様はこの安息日、安息年、ヨベルの年を守るようにと命じられたのでしょうか？

一つ目、この制度をとおして、この地において生きている人々に真の安息を経験し、御国での永遠の安息を待ち望むようにさせるためです。人のために与えられた二つの祝福の通路があると言われていますが、それは一夫一妻（いっぴい）の家庭制度であって、もう一つは安息日制度です。一人の夫に一人の妻の制度が神様から与えられた祝福の制度である理由は、この家庭をとおして真の幸せを味わい、御国での幸せをこの地においても少しも味わわせるために与えられた制度だからです。そして、安息日を神様から与えられた祝福の制度とする理由は苦しい人生の旅路の中でも神様から与えられるこの安息日、安息年、ヨベルの安息をとおして御国への永遠の安息を味わい、待ち望むようにと設けられた制度だからです。

二つ目、ヨベルの年に何の条件もなく奴隷が解放され、負債が帳消しされることは値なしに我々の罪を赦してください。ヨベルの年へ宣布をとおして、我々を縛るあらゆる抑圧（よくあつ）と鎖（くさり）が解決されることは、イエス・キリストによるまことの自由と解放、安息を表しています。

三つ目に、この制度はキリストによる福音の宣布を表します。これを表す本文が新約聖書のルカの福音書4章18-19です。

“「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」（ルカの福音書4:18-19）”

この本文はイエス様が試みを受けてから、公（おおやけ）に働き始められた時、会堂に入って読まれた箇所です。イザヤ書6:1-2節の引用文です。神様なるイエス・キリストがイザヤ書の一部を読むながら、ご自分の働きをあらかじめ教えてくださったのです。ここで言われている“捕られ人に赦免”は奴隷の解放を意味し、“盲人には目の開かれること”は元通りに回復される土地返還を、“しいたげられている人々を自由にする”とは負債を帳消しすることを意味します。ですから、レビ記に出ているヨベルの年への制度は後に来られるイエスキリストの救いの働きを表し、福音の宣布をあらかじめ見せて下さるお手本的な制度だったのです。

メッセージをまとめます。愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん！

レビ記は根本的に人間である我々がどうやって神の御前に出るのか、御前に出た我々がどうやって神様と交わるのかを表す聖書でもあります。レビ記に出るヨベルの年を通してイエスキリストにある自由と解放、そして聖徒が味わう永遠の安息を教えてください。この世にまことの喜びと安息と自由がどこにあるのでしょうか？

イエス・キリストにのみ喜びと自由と永遠の安息があります。キリストにあるこの安息と自由と解放と喜びを味わいながら、永遠の安息をともに待ち望む信仰の家族となりますようお祈り申しあげます。新しい6月が始まりました。イエスキリストある真心の安息、体の安息、魂の安息と回復と解放を体験するクリスチャンプレイズチャーチ家族みんな恵みの6月となりますように主イエスキリストの御名によって祝福し祈ります。アーメン！